



Title	<紹介>信多純一・川崎剛志著『現代語訳 完本 小栗』
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	語文. 2015, 104, p. 75-75
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70963">https://hdl.handle.net/11094/70963</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

信多純一・川崎剛志著 『現代語訳 完本 小栗』

箕浦尚美

「説経『小栗』」は、貴種にして放埒な勇者小栗と照天の恋愛と別離、流転、再生、そして成神の物語である。壯絶な人の生と苦惱と救済を哀切な調子で語った説経の代表作で、「さんしょう太夫」「刈萱」「しんとく丸」「愛護の若」等（異説あり）とともに五説経の一つに数えられている。（信多純一・川崎剛志著 『現代語訳 完本 小栗』「解説」）

本書は、信多純一著『現代語訳 完本 浄瑠璃物語』（和泉書院、二〇一二年）に統いて、「現代語訳」「完本」を冠した同型の小型本として刊行された。本文は、「説経正本の古形をほば完備する」宮内庁三の丸尚蔵館所蔵絵巻『をくり』を底本とし、遺文を補つて現代語訳したものである。宮内庁本は、十五巻から成る伝岩佐又兵衛作の壮麗な絵巻であり、本書にも三十七図（うち見開き四図、口絵一図）が収録されている。それらが小さなモノクロ図版（口絵を除く）であるのは残念だが、かえって、物語本文そのものが、読者を作品世界に深く引き込んでくれるようと思われる。絵巻の挿し絵については、別途、太田彩監修『ミラクル絵巻で楽しむ「小栗判官と照手姫」伝岩佐又兵衛画』（東京美術、二〇一一年、一、八〇〇円）によつて鑑賞すると良いだろう。

本書の現代語訳は、信多純一氏による『説経正本集』二（角川

書店、一九六八年）、新日本古典文学大系『古淨瑠璃 説経集』（岩波書店、一九九九年）の緻密な本文校訂・注釈を経て成った精確なものである。また、解説は、療養中の信多先生から依頼を受けた川崎剛志氏によるもので、氏は、先生の高弟にして熊野信仰・説話・本地物研究の専門家である。

その解説では、説経の歴史と研究史の概略とともに、『小栗』の特性として「因果応報の内実」「本地物における受苦」の二点が説かれている。例えば、前者では、「土車という『因果の車』はそれを引く當行為に関わった人々の薄っぺらな当座の虚言や打算までも善行へと転じ、末繁盛に導いた」点を説明する。説経や本地物における因果応報や勸善懲惡には、現代の感覚からは其感じづらい部分もあるが、そうした点に向き合つての解説は、現代語訳で初めて『小栗』に接する読者のみならず、説経や周辺文芸を研究する者にも有効な道標と言えるだろう。

『小栗』は、スーパー歌舞伎・宝塚歌劇・漫画など、現代の文芸・芸能の中にも生きている。一方、本書解題で指摘されるように、文芸の枠を超えて『史実』としても生き続けている。ゆかりの寺社には小栗・照天の事績や遺品が伝えられ、古代以来の熊野参詣路には「小栗街道」「車塚」などの地名が与えられている。本書が、研究者にも、一般にも、広く読まれることを期待する。

（みのうら・なおみ 甲子園大学専任講師）  
(和泉書院、二〇一四年、一九〇頁、二、〇〇〇円)